

創業53年目を迎えた昭電。本社がある東京都墨田区には、自社の雷害・地震対策技術を施した東京スカイツリーが建つ。地震・雷害など個別対策を謳う専門メーカーはあるが、「防災・減災」製品・サービス、「危機管理・セキュリティ」対策システムなどトータルソリューションを提供する、数少ない総合安全企業の地歩を築いた。「厳しい時代を生き抜くためには強みが必要。安全の総合化はそこから導き出した道」という2代目社長、太田光昭氏に今後の戦略を聞いた。



I B Mのコンピュター用電源装置で起業し、その後、地震や雷など自然災害から設備を守る技術を中心に、ネットワーク技術と周辺事業を拡大してきた。具体的には雷害・地震対策、ネットワーク、セキュリティ、ファシリティーの各分野を融合した事業の展開だ。

トップに聞く

情報化社会の到来は、生産性を上げるための投資から、生産が止まるリスクを回避するための投資を不可避にした。2011年3月の東日本

IoT(モノのインターネット)やAI(人工知能)、ロボット産業などに必要不可欠な事業をワンストップで提供する企業へと業態を進化させ

災害や国防分野に注目

大震災では、東京電力による原発事故関連の相談や補償対応を行うコールセンターの緊急構築が求められ、短い納期に間に合わせて絶賛された。今日、高まる大規模な災害リスクから設備を守り、CMS(危機管理室)やデータタイ

オード、入退室管理など監視・セキュリティ、さらには総合安全企業への歩みは、電力、放送、通信、金融、鉄道など広範なインフラ事業者相手に培った、信頼と実績がベースにある。これを維持するため「価値の共有を通じて、お客さまがなかなか気を配れないようなところもソリューションでできるプロ集団の育

成」に力を注ぐ。

一方、1級建築士事務所登録もしており、「確かな設計力と安全な施工管理」も経営資源の1つ。「雷害対策で重要な接点、地震対策の耐震・免震、このほかネットワークやセキュリティ、空調や電源など、さまざまな工事に対応できる」陣容を整える。また、創業スピリットである「本物志向」「開発主導型

企業」を継承。ものづくりにこだわるメーカーとして積極的に設備投資を行っている。昨年4月から本格稼働している短絡電流試験装置のほか、世界最高レベルの雷インパルス発生装置、3次元地震波発生装置などの評価試験設備を導入。先端的な実証研究にも余念がない。

今後の展開として「3年後の東京オリンピック・パარიピック、さらに高度化する情報・社会インフラの安全を守る取り組みを強化していく」とし、伸びしろを見込める分野として「激しさを増す自然災害への備えのほか、サイバーテロなど深刻化する人的災害への対策が一層急がれる。特に国防予算に注目している」と指摘する。

(おおた・みつあき) 1991年富士電機入社。98年昭電入社。2005年早大大学院情報生産システム研究科修了、同年昭電社長に就任。日本雷保護システム工業会の理事を務める。昭電入社後は、官公庁受注企業のイメージにフライングを持ち込み、自身が手掛けた家庭向け雷害対策機器「サンダーブロッカー」はグッドデザイン賞(00年)を受賞。学生・富士電機時代はスノーボードで長野五輪を目指した。「競技人から安全企業人として五輪を支えたい」。千葉県出身、49歳。